

弥永原6

—弥永原遺跡群 第9次調査—

2008

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が培われ、今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、やむをえず破壊される遺跡については発掘調査を行なって、往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成18年度に行ないました、弥永原遺跡群第9次調査の成果について報告するものです。本書が皆様の地域の歴史に対する御理解の一助となり、また歴史学、考古学上の研究資料として活用戴ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において、費用の負担など多大な御協力を戴きました、安永チヂエ氏をはじめとする関係各位に深く御礼申し上げます。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

一例 言一

- ・本書は福岡市教育委員会が2006年4月3日から4月28日にかけて行なった弥永原遺跡群第9次調査（南区臼佐3丁目107、112-1の一部）の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・本書の編集、執筆は藏富士が行ない、遺物の実測、図版のトレースについては米倉法子の手を煥わせた。
- ・本書における方位は磁北であり、造構についてはSC（住居）、SK（土坑）、SP（柱穴）等の略号を使用している。
- ・本書に関わる資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目 次

I.	はじめに.....	1
1.	調査に至る経緯.....	1
2.	調査の組織.....	1
II.	位置と環境.....	2
III.	調査の記録.....	4
1.	9次調査の概要.....	4
2.	遺構・遺物.....	4
IV.	まとめ.....	10

挿 図 目 次

図1	周辺遺跡 (1/25,000)	2	図7	SC102・103 (1/60)	7
図2	第9次調査 (1/2,500)	3	図8	SC102出土遺物 (1/3)	8
図3	調査地点 (1/400)	4	図9	SC103出土遺物 (1/3)	8
図4	遺構配置 (1/150)	5	図10	SK100 (1/30)	9
図5	SC101出土遺物 (1/3)	6	図11	SP出土遺物 (1/3)	10
図6	SC101 (1/60)	6			

図 版 目 次

図版1	上 調査区北側 (西から)	下 調査区南側 (西から)
図版2	上 SC101～103 (西から)	下 SC101 (西から)
図版3	上 SC102・103 (北西から)	下 SC102 (西から)
図版4	上 SC103 (西から)	下 SK100 (南東から)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成17年11月28日、安永チヂエ氏より、南区曰佐3丁目107、112-1の一部における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財課に対し埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地（弥永原遺跡群）内であることから、埋蔵文化財課では確認調査を行ない、現地表下30cmで遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、建築による遺跡への影響は避けられないということになり、発掘調査による記録保存で、対応することとした。

調査の開始は平成18年4月3日。4月28日にすべての作業を終了した。調査にあたって、安永チヂエ氏をはじめとする関係各位には、多大な御協力をいただいた。記して感謝したい。なお、調査費の一部には国庫による補助を受けている。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託 安永チヂエ

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 平成18年度 埋蔵文化財第1課 課長 山口謙治

調査係長 山崎龍雄

平成19年度 埋蔵文化財第1課 課長 山口謙治

調査係長 米倉秀紀

調査庶務 平成18年度 文化財管理課 鈴木由喜

平成19年度 文化財管理課 鈴木由喜

調査担当 蔵富士寛

調査作業 安東昌信 草場恵子 許斐拓生 酒井康恵 渋谷一明 芹沢淳子 為房紋子 徳山孝恵

中村恵子 西村寿美枝 福島 大 増田ゆかり

遺跡調査番号	0603		遺跡略号	YNB-9	
地番	南区曰佐3丁目107,112-1の一部		分布地図番号	26 上曰佐	
開発面積	953.58m ²	調査対象面積	450.0m ²	調査面積	339.0m ²
調査期間	2006.4.3～2006.4.28				

II. 位置と環境

弥永原遺跡群は福岡平野の南部に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に存在する遺跡である（図1）。弥生時代後期に相当する環溝集落の存在が確認されており、ガラス製勾玉や小型ボウ製鏡が発見されていることでも知られている。また、現在では遺跡の東側に組みこまれている「曰佐原遺跡」では、50基を越える箱式石棺墓、甕棺墓などが検出されており、その内の一つからは長宜子孫内行花文鏡が出土している。このように弥永原遺跡群は周辺における有力な弥生時代集落の一つとみなすことができるが、その位置付けは遺跡東側の春日市域に広がる「奴国」の中心領域、須玖岡本遺跡遺跡など春日丘陵一帯の遺跡群との関係を抜きにして語ることはできないだろう。

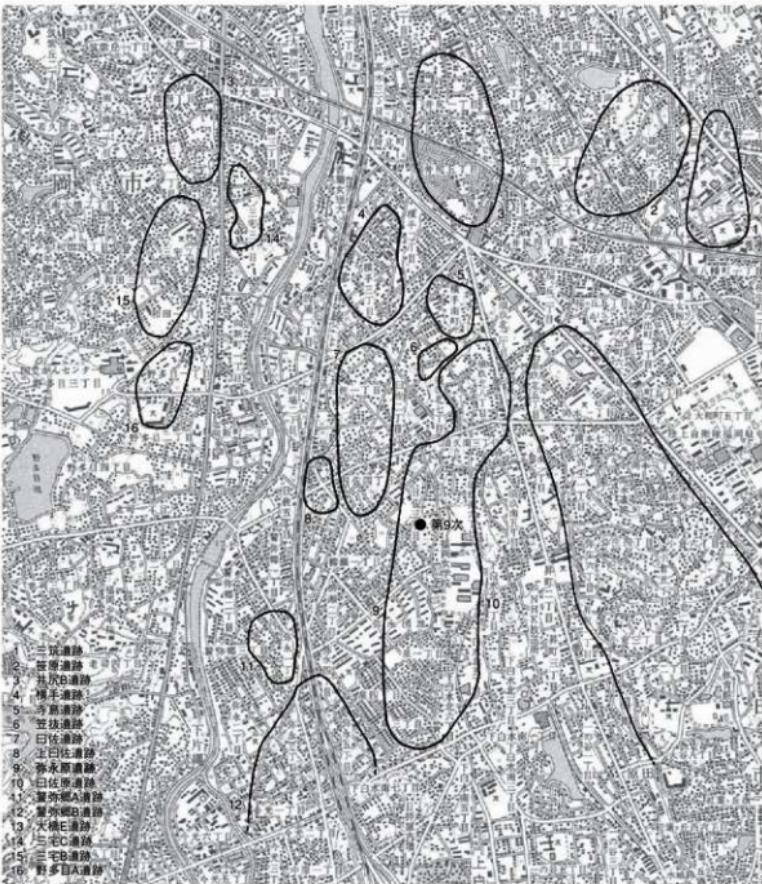


図1 周辺遺跡 (1/25,000)

弥永原遺跡群ではこれまで8次にわたる調査が行われている。第1次調査は九州大学および福岡県により現在の福岡女学院キャンパス内で行われたもので、石蓋土坑墓、箱式石棺墓、甕棺墓など、多数の墓が検出されている。続いて第2次調査では福岡県・九州大学、第3次調査では福岡市が調査を実施し、弥生時代後期を中心とする環溝、竪穴住居が発見され、弥永原遺跡群の内容が次第に明らかとなつていった。

以後いさか散発的であるが、福岡市教育委員会により、弥永原遺跡群の調査が継続して行われている。第4次調査（横山編1990）・5次調査（宮井編1999）・8次調査（久住編2005）では弥生時代後期の竪穴住居等、集落の様子が明らかにされ、第6次調査では、甕棺墓、土坑墓、石蓋土坑墓、石棺墓といった埋葬遺構が多数確認されている（長家編2004）。7次調査でも、弥生時代後期の環溝を検出している。このように、集落・墓地としての弥永原遺跡群の内容は次第に明らかとなっているといえるだろう。

文献

- 横山邦雄編1990『福岡市公園関係埋蔵文化財調査報告書』I 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第219集
宮井善朗編1999『弥永原遺跡4』—第5次調査—福岡市埋蔵文化財調査報告書 第604集
長家 伸編2004『弥永原遺跡5』—第6次調査—福岡市埋蔵文化財調査報告書 第830集
久住猛雄編2005『弥永原遺跡群第8次調査』『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.18

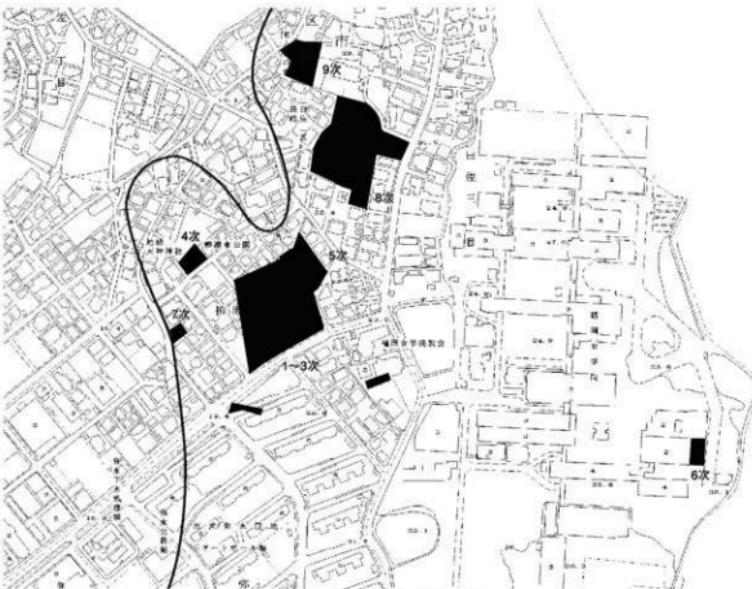


図2 第9次調査 (1/2,500)

III. 調査の記録

1. 9次調査の概要

今回の調査（第9次調査）地点は弥永原遺跡群の西側にあたり、遺跡の標高は23m前後を測る。遺跡の西側は造成により比高差数メートルの崖状を呈している。また周囲も宅地化が進んでおり、地形の改変も著しい。調査は申請地の東側、台地の旧状を留める450m²を対象としている（図3）。

調査はまず、バックホウによる表土剥ぎより開始し、表土下20~30cmの暗赤褐色土上で遺構の存在を確認。調査を開始した。遺構には竪穴住居（SC）3、土坑墓（SK）1、ピット（SP）がある（図4）。なお、遺構の表記については、上記の略号を使用し、ピットについては001から、竪穴住居等その他の遺構については100からの番号を付している。遺構の残り具合は決してよいものではなく、かなりの削平を受けているようだ。遺物の出土も限られており、コンテナ5箱に過ぎない。弥生時代の遺物を主体とする。以下では、各遺構の内容や出土遺物について、述べることにする。



図3 調査地点 (1/400)

2. 遺構・遺物

(1) 竪穴住居

SC101 (図6)

調査区北東側に位置するもので、平面は4×3.5mの略方形を呈する。遺構の深さは20cmにも満

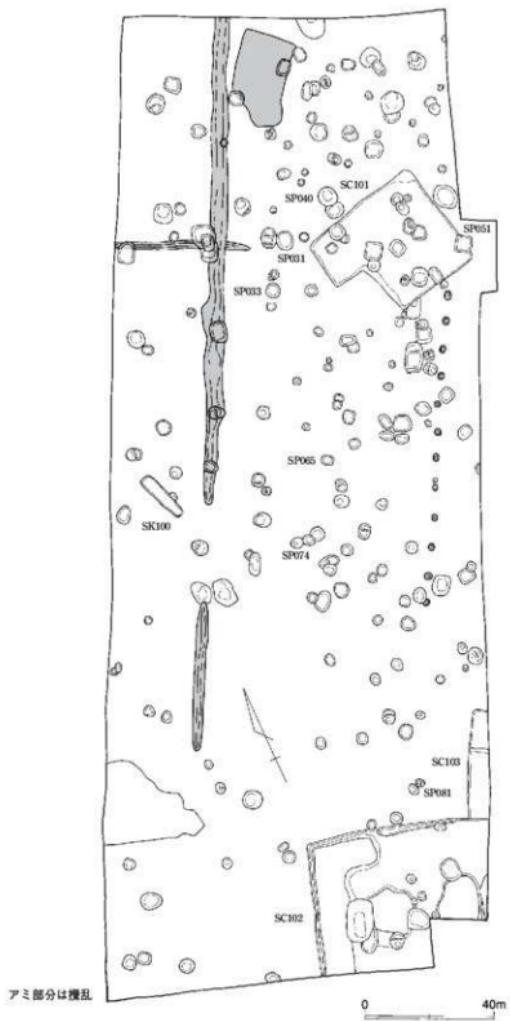


図4 造構配置 (1/150)

たず、遺構の遺存状況は悪い。壁溝の存在は確認できなかった。住居の南西隅部には、地山の削り出しにより、 $1.8 \times 1.2m$ を測るベッド状の高まりを造っている。床面は地山を削り出して、ほぼ平坦に仕上げられており、貼床等の造作は認められない。住居中央にある掘り込みが炉跡であり、炭化物の堆積が認められる。その左右に存在するのが主柱穴であろう。20~30cm程の方形を呈し、深さ30cm前後である。

出土遺物（図5）

数少なく、細片がほとんどである。1は甕口縁部片である。口径（復元）14.6cmを測る。口縁部は「く」字に屈曲する。摩滅がひどく、調整は不明である。

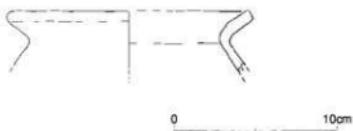


図5 SC101出土遺物（1/3）

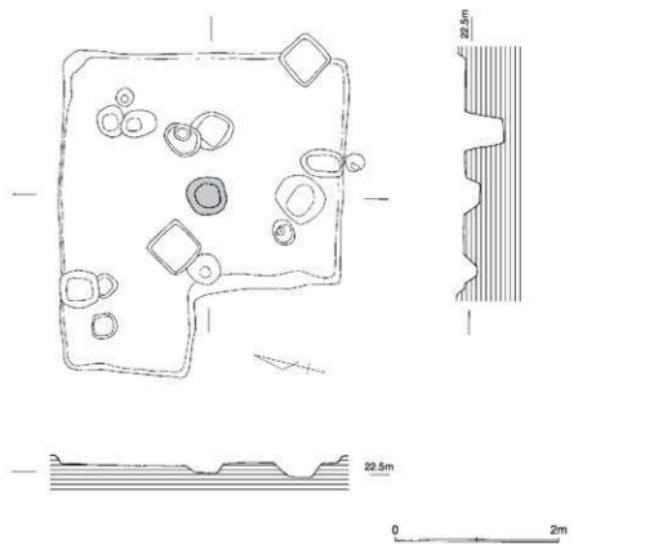


図6 SC101 (1/60)

SC102・103 (図7)

調査区南側に存在するもので、調査区内においてはその一部が検出できるのみである。SC102とSC103は切り合い関係にあり、SC102はSC103を切りこんでいる。

SC102 (図7)

調査区の南隅部に検出した住居で、全形は不明であるが、 $6 + \alpha \times 4 + \alpha$ mを測る比較的大形のものである。住居西辺側には、「L」字状を呈する、地山削り出しによるベッド状遺構を付している。住居中央のピットには焼土及び炭が堆積しており、この部分が炉跡に相当するのだろう。これを考慮すれば、SC102は 6×5 mほどの平面略方形を想定できようか。住居の周囲には壁溝が巡り、住居の床面には一部、貼床を施している。

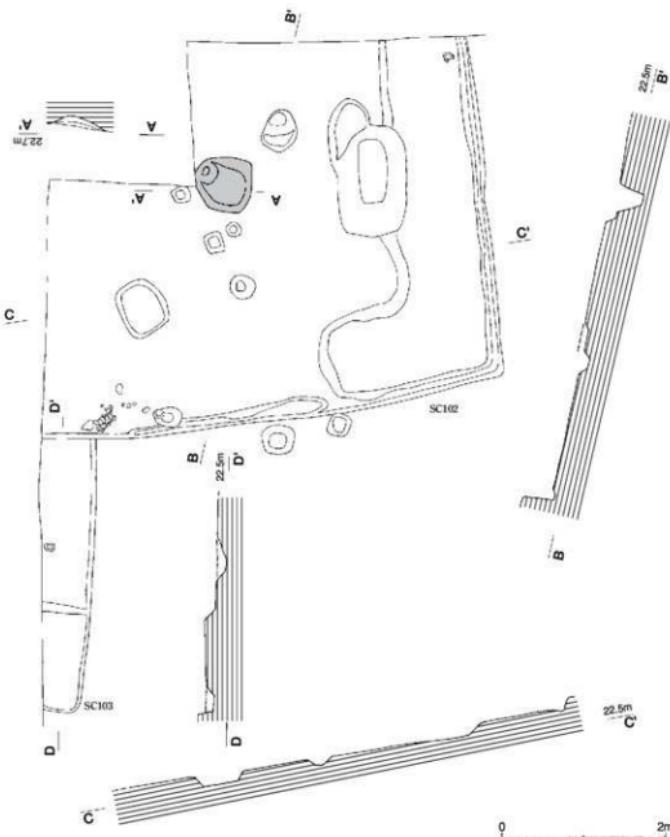


図7 SC102・103 (1/60)

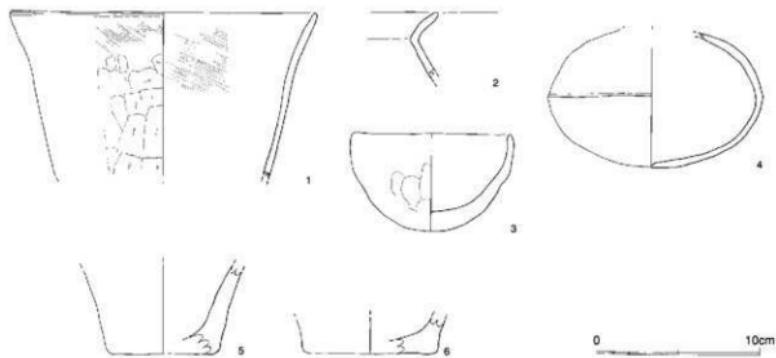


图8 SC102出土遗物 (1/3)

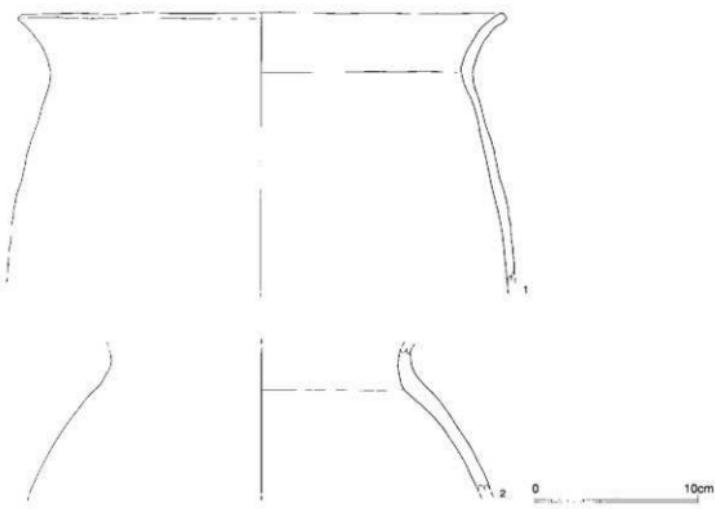


图9 SC103出土遗物 (1/3)

出土遺物（図8）

1・2は甕口縁部片。1は口径（復元）18.9cmを測る。頸部の屈曲は極めて弱い。実際の胴部は図よりふくらみを持つものと思う。床面上より出土。内・外器面にはハケ目調整を施し、外器面には部分的にケズリ状の痕跡が残る。2は「く」字に屈曲する口縁部を有するものである。摩滅が激しく調整は不明。3は椀。口径9.6cmを測る。4は壺胴部片。最大径は胴部中央やや下寄りにあり、13.2cmを測る。胴部中央には弱い突線を巡らしている。床面上より出土。5・6は甕等の底部片。摩滅が激しい。

SC103（図7）

SC102の北側に存在するもので、調査区内ではごく一部を検出したに過ぎない。方形の住居で、北辺側には地山削り出しによる幅1.2m程のベッド状造構を配する。床面には一部貼床を施す。

出土遺物（図9）

1・2は甕口縁部片。1は口径（復元）30.0cmを測る。頸部の屈曲は弱く、口縁部は緩やかに外反している。2は頸部片。1と同じく、頸部の屈曲は弱い。

(2) 土坑墓

SK100（図10）

調査区中央西寄りで検出したもので、主軸の方向をN-21°-Wにとる。長さ1.6m、深さ0.2~0.45mを測り、幅0.45~0.25mと北側が幅広くなっている。この墓は北頭位のものであるといえよう。各壁の掘り込みはほぼ垂直で、底一面にはベンガラを施す。出土遺物はない。

(3) ピット群

ピットは調査区全体にわたって認められるが、北東側はやや密に分布する。有意な配列を見出すことができず、掘立柱建物等の存在は不明であるが、ピットのうちのいくつかは方形の掘り込みで、数十センチの深さを有しており、何らかの建物が存在した可能性も十分考えられる。ピット出土の遺物は小片が多く、時期の比定は困難であるが、図に示した遺物をみる限りにおいては、その多くは竪穴住居や土坑墓とほぼ同時期の所産として考えることができるだろう。

出土遺物（図11）

1は高杯口縁部片。2~4は甕口縁部片。
2の頸部の屈曲は弱い。4は口縁部が
「く」字に屈曲する。5は椀。口径9.0cm
を測る。6は二重口縁壺の口縁部片。
内・外間にハケ目の痕跡が残る。7は甕
底部片。8は鉢。頭部径（復元）18.0cm
を測る。

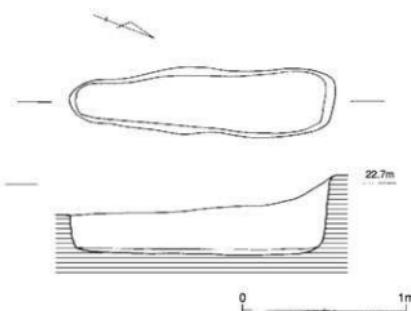


図10 SK100 (1/30)

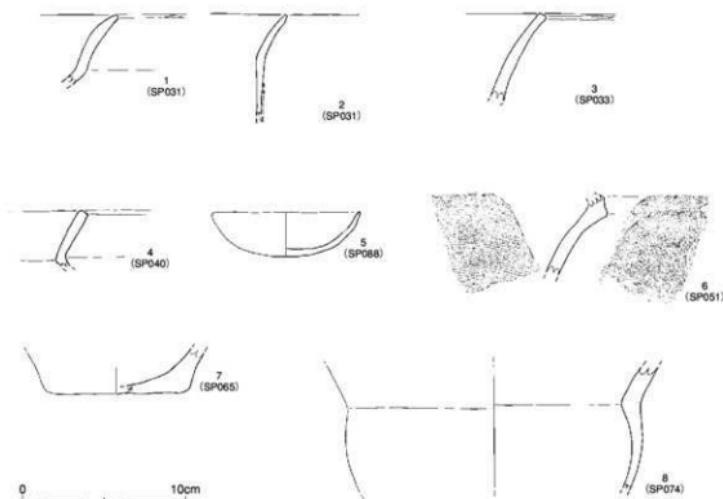


図11 SP出土遺物 (1/3)

IV. まとめ

今回の調査で検出した遺構は、削平のため決して遺存状況の良いものではなかったが、予想外に多くの遺構をみることができた。今回の調査では残念ながら、遺物の出土が少なく、時期比定の決め手に欠くが、今回検出した住居は、おむね弥生時代後～終末期に位置付けることができるだろう。土坑墓は遺物の出土が無いが、形状をみる限り、竪穴住居とさほど変わりの無い時期（弥生時代終末期）のものとして捉えることができるだろうか。検出したピットも遺物をみる限り、同様の時期として判断して良い。

今回の調査では、弥生時代の後～終末期を中心とする遺構の数々を確認することができた。他時期の遺構をほとんどみることができないのも特色として挙げることができよう。今後は、当調査地点の南側で行なわれている1～5次調査における所見も含め、当該期における集落の広がり、そして内容の把握が課題といえるだろう。



調査区北側（西から）

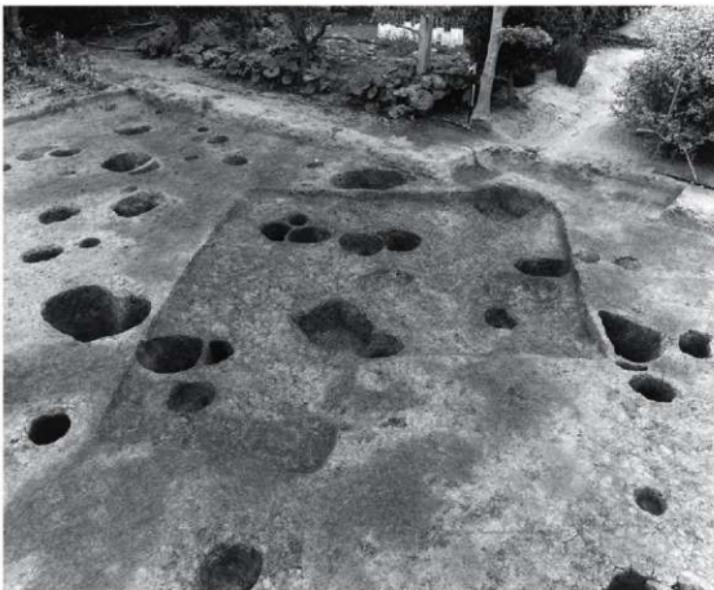


調査区南側（西から）

図版2



SC101~103 (西から)



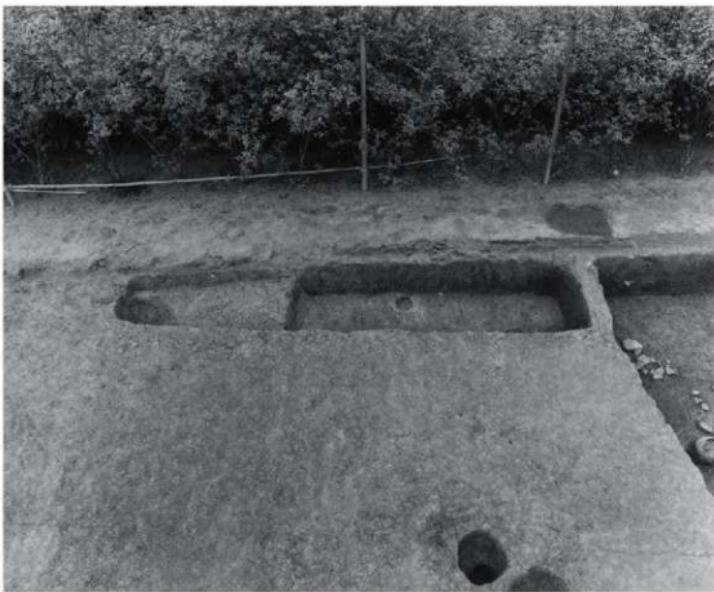
SC101 (西から)



SC102・103（北西から）



SC102（西から）



SC103（西から）



SK100（南東から）

報告書抄録

ふりがな	やながばる						
書名	弥永原6						
副書名	弥永原遺跡群 第9次調査						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1014集						
編著者名	藏富士 寛						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	2008年3月17日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東緯 °°°	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
やながばる 弥永原遺跡群	ふくおかけんひめいわらし みながばる 福岡県福岡市南区 ひなみ 白佐3丁目107、112-1	401307	0105	33° 32° 8°	130° 26° 22°	2006.4.3 ~ 2006.4.28	339 共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
弥永原遺跡群	集落 墓地	弥生	竪穴住居 土坑墓	弥生土器			
要旨	今回の調査では弥生時代後～終末期の竪穴住居、土坑墓を検出した。他時期の遺構をほとんどみることができないことも特徴として挙げることができる。今後は、当調査地点の南側で行われている1～5次調査における所見も加味して、当該期における集落の全容確認が課題となるだろう。						

弥永原6

－弥永原遺跡群 第9次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1014集

2008(平成20年)年3月17日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 プリコム

福岡市博多区冷泉町1-20 黒川紙園ビル1F



